

平成 6 年 10 月 15 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

古文書の発見

テレビや新聞などの報道によると、毎週、必ずと言って良いほど、^{こもんじょ}古文書が新しく発見されています。古文書は昔の人々の生活や社会の様子を、現代の私たちに知らせてくれる貴重な史料です。

日本で発見された古文書は、書かれている素材から、木簡と紙文書に分けることができます。木簡は、幅 10 センチ前後、長さ 20 ～ 30 センチ、厚さ 2 ～ 3 センチの細板に、墨で文字を記入したものです。一般に木製品は腐りやすいのですが、井戸や溝の中で地下水に密閉されると還元状態になっていたために残ったものです。平成 3 年 12 月 5 日の新聞によりますと、滋賀県中主町西河原の湯ノ部遺跡からは、天武五年（676）の年号を示す、わが国最古の木簡が発見されたとのことです。

一方、紙は植物などの繊維をからめ合わせて作ったもので、中国の蔡倫が西暦 105 年に発明し、日本には 605 年に伝わってきたと言われていています。日本の紙は明治 7 年頃までは、紙といえはすべて和紙でした。

和紙はコウゾ皮やミツマタ皮などを原料とし、トロロアオイの根などから採取した粘液を加えてすいて作ったものです。洋紙に比べて化学変化をおこしにくく、また漆にひたると虫にも強いいため、さらに残りやすくなります。

木簡や紙に書かれた文字は、墨で書かれており、隅はススとニワカを適度に混ぜ合わせて作ったものです。ススは松や油を不完全燃焼させた時に発生する炭素が原料です。一方、ニワカは動物の皮や骨から抽出したもので、強い粘着力があるため、古くから接着剤として利用されています。

木や紙が腐食に比較的弱いにもかかわらず、炭素は腐食や虫害に強く、またニワカも接着力が強いために、墨で書かれた文字は残りやすく、また、たとえ炭素が流出してもニワカの部分だけ残り、ニワカの残り具合でかつての文字を復原することも可能です。

平成 3 年の秋、木野下 2 丁目の新井文男さんから、古文書が保存されているとの連絡がありました。調べてみると、寛文 8 年（1668）の検地帳や名寄せ帳など、合計 32 冊の古文書が保管されていました。木野下地区の古文書は、発見例が未だ少ないため、古文書の解読によって江戸時代中期の、村の様子が明らかになってきました。今後さらに市内の各地から古文書が発見されると、これまで以上に、かつての青梅市内の歴史をより深く知ることができることになります。

(文責 角田)